

「ヨウダ」の意味に関する認知言語学的考察

飯 干 和 也

キーワード ようだ、メタファー、メトニミー、語用論的強化

A cognitive-linguistic analysis of “*yōda*” in Japanese

Keywords yoda, metaphor, metonymy, pragmatic strengthening

0. はじめに

幅広く意味が解釈できる日本語の助動詞の一つに「ヨウダ」がある。

- (1) 槍を持つ一隊が進む様は、林が動くようだった。
(『コンスタンティノーブルの陥落』塩野七生)
- (2) 犬は一匹だけではなかった。五、六匹はいるようだった。
(『砂の女』阿部公房)
- (3) (社長専用車が近づいてくるのを見ながら、部下が)
社長、お車が参ったようです。

(1)は「まるで」は挿入することはできるが、「どうも」は挿入することができない。(2)はその反対で、「まるで」が挿入できず、「どうも」が挿入可能だ。(3)は「まるで」が挿入できず、「どうも」を挿入する時としない時では表す意味が異なる。おおよそ、(1)の表す意味は「比況」と呼ばれ、(2)は「推量」、(3)は

「婉曲」と呼ばれるものだ。¹

本稿は、このように複数の意味に解釈されうる「ヨウダ」を考察の対象として、「ヨウダ」が複数の意味を表しうようになった経緯を、特に「比況」や「推量」と呼ばれるものを中心に認知言語学における概念を援用しながら考え、一つの仮説として提示するものである。

「ヨウダ」は語の成り立ちから考えて、「そのようなありさまです」と単に事態のありさまを述べる「様態」の意味が元来であったと考える。本来は「様態」を表すに過ぎなかった「ヨウダ」が認知言語学で言われるところのメタファーやメトニミーが作用する文脈において使われることにより、話者が「比況」や「推量」の意味を見出すようになり、それが繰り返されるうちに「比況」や「推量」の意味・用法が「ヨウダ」の内に取り込まれていったという考えを述べる。この一連の過程は「語用論的強化」と呼ばれる汎言語的な現象によって説明が可能なものである。

本稿は、「ヨウダ」と類似表現をなす「ラシイ」「ミタイダ」「ソウダ」などの形式との差異を明らかにする役割や日本語学習者に対して、これらの語の効果的な指導法を考案する際の基礎的研究に貢献できるものと考えている。

1. 先行研究と本稿の立場

「ヨウダ」に関する研究は、「推量」の意味において類似表現をなす「ラシイ」との比較・対照研究が主で、「『ヨウダ』と『ラシイ』が使い分けられる時の要因は何か」「二つが類似表現を成すのは何故か」といったことを中心に研究が進められてきた。これらの研究は寺村(1979)を発端に数多くの議論がなされてきた。「ヨウダ」と「ラシイ」の問題は、未解決の部分はあるものの、数々の示唆に富む論点が提出され、今もなお活発に議論されている。また一部の成果は日本語教育においても応用されはじめているようだ。

しかし、これまで「ヨウダ」の研究は「ラシイ」との比較を中心に議論されるだけで、「ヨウダ」を個別に扱った研究はなされてこなかった。「ヨウダ」を個別に扱い、考察の対象とした研究であっても、「ヨウナ」「ヨウニ」の形式で表される修飾用法に関する研究がほとんどで、文末用法に関する研究は見受けられない。修飾用法・文末用法に限らず「ヨウダ」の持つ意味を幅広く考察した研究に森山(1995)があるが、非常に示唆に富む論であるものの、

氏の述べておられる説を裏付けるためには検証作業が不十分であると指摘せざるをえない。

本稿は、「ラシイ」との比較のみにおいて進められてきた「ヨウダ」研究の立場とは異なり、「ヨウダ」を個別に取り扱い、「ヨウダ」が表す本質的な部分を明らかにしようとする立場に立って考察をすすめていく。「ヨウダ」が表す本質的な部分を明らかにして、その上で「ラシイ」と比較し、考察するという作業もなされなければならないだろうと考えるからである。

2. 考察の方法

本稿では『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』（新潮社 1995）から「ヨウダ」の用例を集め、これらの中から文末用法の「ヨウダ」に限定して考察をすすめていくことにした。『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』の中から戦後に書かれた作品（日本文学48作品、海外翻訳文学1作品）を選び、主節、並立節、確定条件節に現れた「ヨウダ」を抽出した。「ヨウダ」の形態については「ヨウダ」「ヨウダッタ」「ヨウデス」「ヨウデシタ」「ヨウデアル」「ヨウデアッタ」の6形態を考察の対象とした。以上の条件で検索した結果、1280例の用例が見つかった。

本稿では、用例数が最も多かった動詞に接続した「ヨウダ」にのみ焦点をあて考察をすすめていく。動詞に接続した「ヨウダ」の用例数は961例あった。この中には「食べナイヨウデス」「食べテシマッタヨウデス」のように動詞と「ヨウダ」の間に助動詞や補助動詞があるものや、「食べハスルヨウデス」のように助詞が挿入されたものも含まれている。

接続する品詞の違いが「ヨウダ」の意味解釈に与える影響や、「ヨウダ」に接続する品詞の分布などは十分に考慮しなくてはならないことだが、今回はそれを考察するまでには至らず、動詞に限って考察した。参考までに、接続品詞別に分類した「ヨウダ」の用例数を提示する。

表1 接続品詞別「ヨウダ」用例数

動詞+ヨウダ	961例
形容詞+ヨウダ	100例
形容動詞+ヨウダ	26例
名詞ノ+ヨウダ	193例

3. 「ヨウダ」の「様態」について

「ヨウダ」という語の成立について考えるとき、先行研究において一致した見解がみられる。

形式名詞「やう」に断定の助動詞「なり」が付いてできた。

(『日本語文法大辞典』明治書院 p.805「やうなり」の項)

名詞「よう(様)」に助動詞「だ」の付いた語。

(『日本語文法大辞典』明治書院 p.824「ようだ」の項)

比況の助動詞「ようだ」は体言「よう」(様)に助動詞「だ」の付いたものである。

(『現代語助動詞の史的研究』吉田金彦 p.324)

語源的には、名詞「よう」に断定「だ」の付いたもの。「よう」(様)は「ありさま」。

(『基礎日本語辞典』森田良行 p.1181)

現代語の「ようだ」の原形が古典語の「やうなり」であることはいうまでもないが「やうなり」は、もと、体言「やう(様)」に断定の助動詞「なり」の接続した連語である。すなわち「……の状態である」「……と同じ様子である」という意味を表すものである。

(『古典語現代語助詞助動詞詳説』松村明編 p.312)

上記の記述からも分かるように、「ヨウダ」また、その古語「ヤウナリ」は形式名詞「よう(やう)」に断定の助動詞「だ」「なり」が接続したのから成り立っていると考えられていることが分かる。

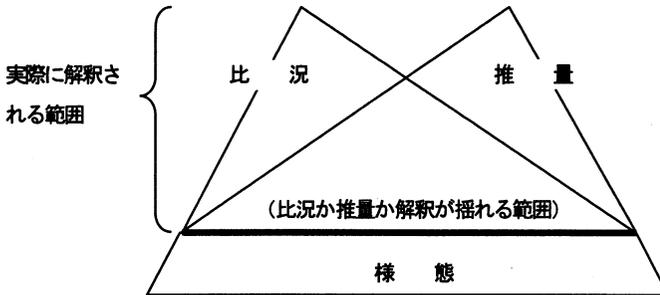
「よう(やう)」は「ありさま、様子、様」ということを表し、それに断定の「だ(なり)」が付いているので、全体としては「……のありさまです」「……の様子です」の意味に解釈できる。

本稿では、「ヨウダ」という語が成立した当初に表したであろう「……のありさまです」「……の様子です」といった意味を「様態」と呼ぶことにする。

「ヨウダ」という一つの形態が比況や推量の用法を持ちえたり、比況や推

量の間で解釈が揺れたりするという現象を考えるために、本稿では「様態」という意味を設け、この意味が「比況」や「推量」の用法の基盤を成していると考え。現代では、「様態」は基盤的な部分をなしているにすぎず、実際に解釈される際の表層的な部分は、認知言語学の概念で説明されるプロセスを経て持ちえた、「比況」や「推量」の意味であると考えた。本稿における「様態」の位置づけをモデル図にして以下のように示してみる。

図1 様態・推量・比況の関連モデル



後に述べる「様態」と「比況」との関連性や「様態」と「推量」の関連性を考えるうえで、本稿では「様態」を以下のように定義しておく。

【様態】

話者が外界に実在する視覚で捉えた事態について「そのような様である」と単に述べること。話者の心的態度は「それがそのような様である」という断定のみ。

4. 語用論的強化 (pragmatic strengthening)

ここからは、何故、「ヨウダ」が推量や比況として解釈できるのか、認知言語学の理論を援用しながら考察する。

認知言語学の理論に語用論的強化(pragmatic strengthening)と呼ばれるものがある。河上誓作編著『認知言語学の基礎』(研究社出版 1996)では語用論的強化を次のように説明している。

ある表現をある状況の下で実際に使用する際の話者の解釈が、いつの間にか次第にその語の意味に取り込まれてしまうこと (p.184)

語用論的強化は多くの言語において観察される汎言語的な現象であることが確認されている。

例えば、英語の接続詞 *while* は、古期英語では名詞であり、この名詞用法の名残が *for a while* (しばらくの間) という表現に残っている。中期英語では時を表す接続詞として用いられるようになり、更には例(4)のような譲歩を表す用法も現れるようになった。

(4) **While I have no money, you have nothing to spend money on.**

(私には使うお金がないが、あなたはお金を使うものがない)

詳しくは『認知言語学の基礎』(河上誓作編著 1996)の中で紹介されている Traugott (1982) を参照されたい。

日本語においては引用の「って」が語用論的強化の例として指摘されている。普通、引用の「って」は、その後ろに「言う」などの発話行為を表す動詞を伴うが、次第に後続動詞を伴わない終助詞的な用法が現れるようになった。(例: お母さんが来なさいって言ってる。 → お母さんが来なさいって。) これは、「って」が特定のタイプの動詞と意味的に結びつくことにより、後続動詞を伴わなくても聞き手の解釈に支障をきたさなくなったからだと考えられている。この「って」は今日では様々なコンテキストで見られるようになった。(例: 「あいつが大怪我したって!?!」「そんなこと言ったって…」「大丈夫だって!!」) このように、「って」が後続の動詞を伴わなくても、様々な話し手の発話行為を表すことができる終助詞のように使われる現象、言い換えれば、「って」が発話行為の意味を含むようになった現象は語用論的強化の一例であると考えられている。これも詳しくは小池生夫他(2003) (『応用言語学辞典』 研究社) を参照されたい。

語用論的強化については後にもう少し詳しく述べていくが、ここでは簡単にこの現象に触れ、次に「ヨウダ」が比況用法を持ちうることについて考察する。

5. 様態「ヨウダ」から比況「ヨウダ」

「ヨウダ」が比況用法を持ちうる理由には、認知言語学で言われるところのメタファーが深く関わっていると考える。最初にメタファーの大まかなことについて触れておきたい。

メタファーは私たちが未知のものに遭遇して、それが何であるかを理解したり、他人に説明したりする時や、新しい事物が生じてそれに名前をつける必要が出てきた時などに、私たちに備わっている対処の仕方を説明するのに有効な概念である。メタファーの定義の一例を『認知意味論』（松本曜 大修館書店）より挙げる。

メタファー：2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。（p.76）

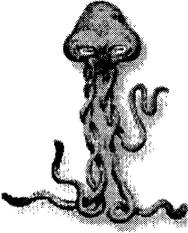
例えば「椅子の足」という表現について考える。「椅子の足」とは直接、椅子が床に接し、椅子本体や私たちが椅子に座った時に支える部分を指す。では何故、手や頭などではなく「足」なのか。

人間の足は、移動と体の支持という役割を果たしている。それから「椅子の足」も同様に支持するという同じ役割を果たしている。それから、形状が似ていることも指摘できる。数はまちまちであるが、足も「椅子の足」も棒状の形をしている。つまり、足と「椅子の足」は、その役割と形状の点から類似性があることが分かる。そして、ある時点で私たちが何らかの理由で椅子の支柱部分を表現する必要がでた時に、その役割と形状の類似から「椅子の足」と比喩を用いて表現し、それが現在においてははっきり定着した表現になってしまったと考えられる。

また、2つの事物・概念の類似性を見出すためには2つの対象を比較しなければならないが、この「比較する」という能力は人間の持つ認知能力の中で、最も基本的な能力であると認知言語学や関連分野の学問では考えられている。比較という人間の認知能力に基づいたメタファーは人間の理解するという行為と密接な関わりがある。

例えば、私たちが異星人に遭遇した時のことを考えてみる。図2のような異星人がいたとして、このような生物は我々が初めて見るものであり、私た

図2 異星人の想像図



国立科学博物館HPより

ちは知識として知っているものを総動員させて、この生物が何であるかを知ろうとするだろう。この異星人の形状を問題にする場合、誰もが「タコ」や「クラゲ」を連想するに違いない。この時のプロセスを振り返ってみると、私たちは、異星人の形状を知識として知っているものと比較し、それと類似した形状を持つタコ、クラゲという全く異なる領域のものに置き換えて形状についての理解を図ろうしている。つまり、ある事物を類似性の連想に基づいて、他の事物に例えるメタファーを利用しながら理解している。このことから、私たちはどんな未知のものに遭遇しようとも理解するための術を持っていると言える。

メタファーについて概観した。では、「ヨウダ」とメタファーとの関わりを考える。

- (5) かれのはだしの足は汗と埃に汚れて黒っぽい布で包まれているようだったし、何より大きく醜かった。

(『不意の唾』大江健三郎)

例(5)は「まるで」が挿入可能で、「どうも」は挿入不可能なため比況表現である。

「ヨウダ」が本来的に表したであろう様態の意味を考慮して例(5)を捉え直すと、「かれのはだしの足は汗と埃に汚れて、黒っぽい布で包まれている、そのようなありさまだったし……」という具合になるであろう。

メタファーの概念で例(5)の一連の過程を見直すと「かれのはだしの足は汗と埃に汚れている」という事態をより正確に理解・表現するために、その事態と類似した別の事態、つまり「黒っぽい布で(足が)包まれている」という事態を、「比較する」という能力で類似点・共通点を見出した後、連想に基づいて提示し、例えていると考えられる。

このようにして、ある事態の様態をメタファーに基づいて、別の事態の様態に例えて表現することが頻繁に行われると、話者はいつのまにか例えること、つまり比況を表すことが「ヨウダ」の用法だと認識し²、聞き手も「ヨウダ」を比況として解釈するという現象が起きる。これが4. で述べた語用論

的強化である。次に挙げる例を見られたい。

- (6) その流れのなかを鰻の子が行列をつくって、いそいそと遡っている。無数の小さな鰻の子の群れである。見ていて実にめざましい。メソツコという鰻の子よりまだ小さくて、僕の田舎でピリコまたはタタンバリという体長三寸か四寸ぐらいの幼生である。「やあ、のぼるのぼる。水の匂いがするようだ。」

(『黒い雨』)

例(6)も「どうも」が挿入できない比況表現である。本稿で様態は「話者が視覚で捉えた事態を『そのような様である』と単に述べること」と定義した。つまり視覚で捉えられない事態は様態を述べることができない。「水の匂いがする」という事態について考えて見ると、現実ではあり得ないにしろ、このような事態は嗅覚で捉えられるべき事態である。にもかかわらず「ヨウダ」が用いられているのは、語用論的強化により現在においては様態の意味が薄れ、「ヨウダ」には比況の意味があると解釈されるほどまでに変化を遂げてしまったため可能になった表現だと考えることができる。

以上、ある事態の様態を、メタファーに基づいて別の事態の様態に例えて表現・理解する際、「ヨウダ」が用いられることにより、語用論的強化の現象が起き、様態を表す役割から比況を表す役割を果たすようになったという考えを提唱した。

6. 様態「ヨウダ」から推量「ヨウダ」

つづいて「ヨウダ」の推量用法についてであるが、本稿では「ヨウダ」の推量用法にメトニミーが深く関係していると考え。メトニミーとは、おおよそ次のように一般的に定義される。

メトニミー：2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

『認知意味論』(松本曜 大修館書店)

メトニミーについて少し述べると、例えば「昨日、鍋を食べた」という表現の場合、これは文字通り鍋をそのまま食べたという意味ではなく、モツ鍋、石狩鍋などの鍋料理を食べたという意味である。つまり、「鍋」という語は容器を指しているのではなく、鍋の中の料理を指している。このようにして2つの事物が隣接していることに基づいて、一方の物で他方の物を表す比喻がメトニミーと言われる。この例のように隣接性に基づくものは最も基本的なメトニミーの一種であり、他にも種々のメトニミーが存在する。「そろばんをはじく」という表現は「そろばん」がそろばんの球を指しており、全体が部分を表すメトニミーである。また「今、永田町が大騒ぎになっている」という表現は「永田町」という場所が政界を指すメトニミーであり、「いつかはストラディバリウスを手に入れたい」という表現は製造者（ストラディバリウス）が製品（ヴァイオリン）を指すメトニミーである。

メトニミーは上記の例から分かるように、単語が本来指示すべき対象物から異なる対象物へと指示がずれるのが、その特徴である。何故、私たちはこのような表現をするのだろうか。

私たちは、何らかの理由によってある対象を指示するのに困難を伴う場合、別のより把握しやすいもの、既に分かっているものを参照点（reference point）として活用し、本来的に指示したい対象を捉えるという能力が備わっている。この能力を認知言語学や関連分野では参照点能力と呼んでいる。次の例を見られたい。

- (7) A. すみません。ここから一番近い郵便局はどこにありますか。
 B. あそこの信号を右に曲がって、すぐのところにありますよ。

例(7)は道を尋ねる場面である。この時BはAに対して、直接、一番近い郵便局を指示することが難しい。Bが一番近い郵便局が「〇〇郵便局」だと知っていても、「〇〇郵便局」の名前を出したところで、Aにはその「〇〇郵便局」が分からない。そこで、Aにもすぐ把握でき、目立っていて分かりやすい「あそこの信号」を目印（参照点）として、指示したい郵便局の場所を教えている。Aも「あそこの信号」を参照点として郵便局のありかを把握できるわけである。

このようにして何かを参照点として本来の目的の対象を捉える能力が参照

点能力と呼ばれる。この参照点能力は人間に備わっている能力で、メトニミーもこの能力に基づく表現法だと考えられている。「昨日、鍋を食べた」の例の場合、実際に食べたのは鍋の中身であるが、それを適格に表す手段がない。そこで「鍋」という語が、本来表す<ナベ>というものを参照点として、鍋と隣接関係にある<鍋の中身>を指示していると考えられる。

では、こうしたメトニミーと推量「ヨウダ」には、どのような関係があるのか。5. と同じように「ヨウダ」が本来表したであろう「様態」の意味を考慮しながら考察する。

- (8) 「毎日、外出もせずにいると、ずいぶん、退屈だろうが、どんなふうでしたな?」「女中もあんまり呼ばないで、本を読んだり寝ころがったりしていました。そういえば、陰気なお客さんだと女中も話していました。ただ、あのお客さんは、電話がかかってくるのをしきりと待っていたようです。」

「電話を?」鳥飼は大きな目を光らせた。

「はあ。自分に電話がかかってくるはずだと、女中にも言い、私にも言っていました。電話がかかってきたら、すぐに取り次いでくれとおっしゃるのです。どうも、毎日、外出もなさらなかったのは、そのためではなかったかと思われます。」

(『点と線』)

例(8)は「まるで」が挿入不可能で、「どうも」が挿入可能な推量「ヨウダ」である。 部は話者が確実に認識している事態であり、これを事態Aとしておく。 部は話者がそうではないかと思う事態であり、これを事態Bとしておく。 が引かれた一文は、「ヨウダ」が本来表したであろう様態の意味を考慮すると「あのお客さんは、電話がかかってくるのをしきりと待っていた、そういう様です」という具合になるだろう。話者は事態Aを認識しており、そのことから事態Bの様態を表現したい。

真相の分からない事態Bが伝えられる根拠は、事態Aと事態Bが因果関係にあり近接性が高く、事態Bが事態Aの当然の帰着として考えられるからである。

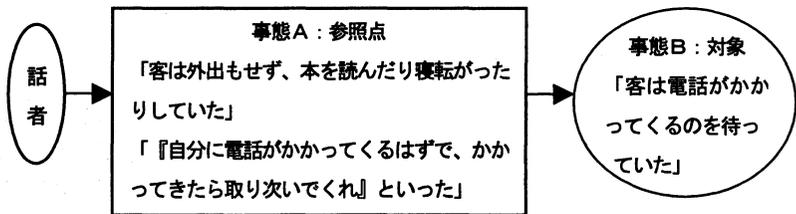
事態Bは話者が実際に確認したものではないから、事態Bに直接言及でき

ない。そこで、既知の情報である事態Aを参照点にして、因果関係から当然の帰着として考えられる事態Bを把握し、「あのお客さんは、電話がかかってくるのをしきりと待っていた、そういう様です」と様態を伝えていると考えることができる。

例(8)の場合、事態Aが起きた原因・理由は事態Bが先にあったと予想されるから、という関係がある。つまり事態Bに言及することは、事態Aが起きた原因・理由を推測することに等しい。

このようなことが頻繁に行われると「ヨウダ」は様態を表わすのではなく、いつの間にか事態が起きた原因・理由を推測すること、つまり推量を表わすことが「ヨウダ」の役割だと認識され、解釈されるようになる。これも4.で述べた語用論的強化と呼ばれる現象で説明がつく。

図3 メトニミーと推量「ヨウダ」



1. 参照点能力により事態Aから事態Bを把握する。
2. 事態Bについて「そういう様です」と様態を聞き手に伝える。
3. 事態Aと事態Bは因果関係にある。事態Bに言及することは事態Aの起きた原因・理由を推測することに等しい。
4. 話者は「ヨウダ」に様態ではなく、推量を表す役割があると認識するようになる
5. 完全に推量を表す形式として解釈されるようになる(語用論的強化)

次の例を見られたい。

- (9) どうしてそんな奇妙な音がするのか、私はその頭骨を手にとってじっくりと観察してみた。そしてもう一度火箸で軽く叩いてみた。くうんという同じ音がしたが、よく注意してみるとその音は頭骨のどこか一カ所から出てくるようだった。

(『世界の…』)

例(9)も「まるで」が挿入不可で、「どうも」が挿入可能な推量表現である。しかし「頭骨のどこかカ所から音が出てくる」という事態は聴覚で捉えられるべき事態であり、視覚で捉えた事態のみについて表現可能である「ヨウダ」は用いられないはずである。それなのに、「ヨウダ」で表現されるのは話者が「ヨウダ」に推量の意味を見出しているからだと考えられる。

以上、6. では事態の起きた理由に言及する際、メタファーに基づいて理由となった事態の様態を述べるはずだった「ヨウダ」が、語用論的強化により様態を表す役割から推量を表す役割にその中心を移していったという考えを述べた。

5.と6.で述べたことをまとめると、本来、様態を表した「ヨウダ」が、メタファーやメトニミーが作用する文脈において使われることにより、比況や推量の意味・用法を「ヨウダ」の内に取り込むという語用論的強化が起き、「ヨウダ」が複数の意味・用法を持つことになったと本稿では考える。このように考えれば「ヨウダ」が持つ複数の用法を統括的に、そして自然に説明することが可能ではないだろうか。

7. 「ヨウダ」の解釈が揺れる時

5. でメタファーに基づいて比況を表す「ヨウダ」が、6. でメトニミーに基づいて推量を表す「ヨウダ」が語用論的強化によって様態「ヨウダ」から変化し、その意味・用法を持ちえたという考えを述べた。

時には、事態Aが起きた理由に言及する際に、因果関係は定かではないが、候補として事態Bが考えられるという場面もありうる。事態Aと事態Bとの因果関係は定かではないから近接性が低く、メトニミーが働かない。そこで、観察される事態Aから、メタファーを理解の手段として用いて、要因を把握するということが考えられる。このような時、「ヨウダ」が推量に解釈されるのか、比況に解釈されるのか、解釈が揺れると思われる。

- (10) 「大抵のスポーツは体をいびつにしちゃうんです」と店員が教えてくれた。「洋服にとっていちばん良いのは過度な運動と過度な飲食を避けることです」私は札を言って店を出た。世界は様々な法則に満ちているようだ。 (『世界の…』)

- (11) 二度、三度と内藤は右のジャブを出す、まったく大戸の体に当たらない。足の踏み込みがなく、腰が引けてしまい、しかもパンチに伸びがないのだ。四年半の空白という事実が、内藤に大きな心理的重圧をかけているようだった。

(『一瞬の夏』)

例 (10) や (11) は「まるで」や「どうも」といった副詞をしかるべきところに挿入しても非文にならないだろう。

ただ例 (10) や (11) に共通して言えることは、あるれっきとした確かに観察される事態があり、その事態を成立させた原因・理由が何であるかを話者は理解しようとしているが、当然の帰着として考えられる元の事態が何なのか定かではない、という文脈である。このような文脈で「ヨウダ」が用いられると比況なのか推量なのか解釈が難しい。それこそ、比況でもなく推量でもなく「そのような様です」と、ただ単に述べる様態の意味が一番しっくりくるように思える。

本稿では、このような文脈で「ヨウダ」の解釈が揺れるということしか明らかにすることはできなかった。このような場合の解釈のあり方については、もっと種々の認知言語学や関連分野の概念を援用しながら細かく考察していく必要があるだろう。

8. おわりに

本稿では従来より言われている「ヨウダ」の語としての成り立ちから、様態という意味範疇を設け、この意味を基盤として、「ヨウダ」が比況や推量としての意味・用法を持ち得るようになったと考えた。比況「ヨウダ」はメタファーが作用する文脈において、ある事態の様態を別の事態の様態に例えるうちに、語用論的強化によって比喩の意味を内に取り込んでいったものであり、推量「ヨウダ」はメトニミーが作用する文脈において、事態の成立要因に言及するうちに、やはり語用論的強化によって推量の意味を内に取り込んでいったものであるとした。

また、「話者が事態を成立させた原因・理由が何であるかを理解しようとする際、当然の帰着として考えられる元の事態が何か定かではない」という

文脈では「ヨウダ」が比況か推量か解釈が揺れるということを指摘した。この点については更なる考察が必要であると思われる。

それから、「ヨウダ」には例(3)のような「婉曲」と呼ばれる意味・用法がある。これについては本稿では全く取り上げることができなかった。婉曲用法についても今後の課題にしたい。

最後に、筆者の日本語教師としての立場から日本語教育への応用について述べたい。

日本語学習者にとって、「ヨウダ」は学習が容易ではない項目の一つである。それは、「ヨウダ」の他に「ラシイ」「ソウダ」「ミタイダ」などの類似表現をなす形式がいくつかあり、それぞれの表す意味が微妙に異なるからだ。これらの語を適切な場面で適切に使いこなせるよう指導するためには、教師側にかなりの力量が求められる。「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」「ミタイダ」の意味記述に関する研究はかなり進んでいるが、これらの効果的な指導法はまだ模索段階である。効果的な指導法を考案するための基礎的な考察として、本稿がその役割の一端を担えるものとする。

参考文献

- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社出版
- 坂原茂 (1985) 『認知科学選書2 日常言語の推論』 東京大学出版会
- 高山善行 (2001) (「やうなり」の項) 山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院
- 丹保健一 (1999) 「「ようだ」の意味をめぐって—様態、推量、伝聞、婉曲を中心に—」『三重大学教育学部研究紀要』第50巻 人文・社会科学
- 永野賢 (1969) 「二 ようだ—比況<現代語>」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文文化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』第1巻3号(『国語学』通巻222号)
- 棚山洋介 (2003) 「第3章 意味の拡張」松本曜編『認知意味論』大修館書店
- 山口明穂 (2001) (「ようだ」の項) 山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』明治書院
- 山梨正明 (1988) 『認知科学選書17 比喩と理解』東京大学出版会
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- 吉田金彦 (1971) 『現代語助動詞の史的研究』明治書院

参考資料

【CD-ROM 版 新潮文庫の100冊】(新潮社 1995)

注

- 1 本稿では「まるで」を挿入して非文にならないものを「比況」を表すもの、「どうも」を挿入して非文にならないものを「推量」を表すものとする。
- 2 このような話者の思い込みとでも言うべき現象は語用論的推論と呼ばれる。次に挙げる推量「ヨウダ」もこの段階を経ていると考えられる。